

OVERWATCH 2

ヒーローたちの夜明け

# 浅はかな神々



ANDREW ROBINSON 著

ストーリー  
*ANDREW ROBINSON*

アート  
*THOMAS ISTEPANYAN*

編集  
*CHLOE FRABONI*

制作  
*BRIANNE MESSINA, AMBER PROUE-THIBODEAU*

デザイン  
*JESSICA RODRIGUEZ*

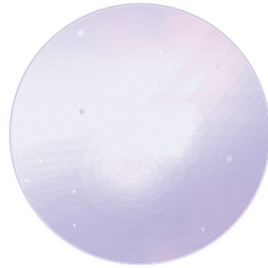
ストーリー監修  
*MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS*

ゲームチーム監修  
*JEFF CHAMBERLAIN, GAVIN JURGENS-FYHRIE,  
PETER C. LEE, MIRANDA MOYER, DION ROGERS*

スペシャルサンクス  
*IAN LANDA-BEAVERS, MADDIY COOK*

日本語翻訳  
*HIDEYUKI OMI*





**沈**みゆく太陽が急場しのぎの集落の廃墟をピンクと紅に染め、燃える残骸と車から立ち上る煙がオーストラリアのアウトバックに黙示録めいた霞をかける。

ジャンカー・クイーンは惨状を眺めてニヤリと笑った。大胆なのか無知なのかは知らないが運がないことは確かだ。ジャンカータウンのわずか100キロ圏内に侵入してきたオムニックの残存戦力を一掃しようと、武装したジャンカーたちがせわしなく動き回っている。ハモンドは、オムニック・クライシス以来アウトバックを脅かしてきたこのオムニックたちが、他の地域のオムニックとは違うことにはかなり前から気づいていた。放射線か、暑さか……あるいは外界から完全に隔絶された環境か。とにかく砂漠の何かが彼らを別のものに変えてしまっていた。彼らはより大きく、やたらと攻撃的で、ジャンカーたちに対する絶え間ない敵意以外は何を考えているのかまるでわからない。戦いにおいても獰猛で、破壊力を向上させるための装備や武器の獲得に余念がなかった。倒れているオムニックの腕が5本あることに気づき、クイーンは鼻で笑った。文字どおり“手数”を増やそうというわけだ。

クイーンが横を通り過ぎようとしたそのとき、その忌まわしい姿のオムニックが目覚まし、彼女の脚をつかんだ。死にかけた虫のように彼女ににじり寄りながら、そいつはかすれた声で言った。「捕まえたぞ……肉袋……」一瞬、クイーンは声を上げそうになったが、そいつが火炎放射器になっている腕を持ち上げると、彼女は素早くスキャッターガン抜き、金属でできた怪物のいかつい頭蓋骨に弾丸を叩き込んだ。念のため、2発。そいつは動きを止めた。

よしっとハモンドはうなずくと、自分のメックを動かそうとしたが、またも彼の注意をひく耳障りな金属音がした。全員が音のした方を振り向くと、ねじれた手足からカミソリのように鋭い刃を生やし、足には高速移動用の小さなオフロードタイヤを装着した大型オムニックが隠れ場所から飛び出してきたところだった。ハモンドは、アウトバックに放置されているガラクタの多くと同じように、腐

食し、ボロボロになってはいたが、その大きさは戦闘用メックに匹敵するオムニックが、胴体に内蔵されているクライシス時代の小型ミサイルを発射しようとしていることに気づいた。

ハモンドがチューと言うと、彼のメックであるレッキング・ボールが「危険！」と警告を発した。

発射されたグラップリング・フックがガツンと膝に命中する。オムニックがよろめいたところにジャンカー・クイーンがすかさず駆け寄り、愛用の斧“カーネイジ”を薙ぎ払った。オムニックは彼女の方を振り向いたが、照準が間に合わない。カーネイジによって頭は胴体から分断され、ミサイルは空に向かって発射されて無意味に爆散した。ジャンカーたちは花火に歓声をあげる。首を失ったオムニックが地響きを立てて倒れた。切り飛ばされた頭部は、固くしまった地面に落ちると一度跳ね、コロコロと転がって止まった。「お前たちは全員……もう……終わりだ」そう言い残し、オムニックは完全に機能を停止した。

「野次馬は失せな！」クイーンが手下たちに吠える。「ショーは終わりだ」そう言う彼女は、手助けへの感謝を示すためにハモンドにうなずいた。

ティンカーのリーダーであるメリがハモンドに顔を向ける。クイーンはジャンカータウンの奥深くから最近掘り出されたある物を再び使えるようにする計画にご執心で、ハモンドとメリはその責任者なのだ。

クイーンは足を止めることなく、崩壊しかけている鋼鉄製の建造物に近づく。ハモンドが中に入ろうと悪戦苦闘しているが、近くにいるジャンカーたちの頭上に金属の破片がバラバラと降り注ぐばかりだった。「お宝が隠されてると思うか、チャンプ？」

ハモンドはクイーンに目を向ける。彼らの目当ては、ハモンドとメリが再建した巨大な反重力スラスタ用部品だった。ハモンド自身は、オムニックがこんな場所でそんなレアなアイテムを見つける奇跡のようなことを疑っていたが、クイーンの気分を盛り上げたかったので、肩をすくめるにとどめた。クイーンが近くにいたスカベンジャーたちに鋭く口笛を吹き、ハモンドはビクッと身震いした。彼の聴覚は繊細なのだ。

「徹底的に調べろ！がっばり儲けさせてもらおうじゃないか！」

ハモンドは、ティンカーやレッカー、スカベンジャーといったジャンカータウンのさまざまな勢力が戦闘で生じたスクラップを解体し、オンボロの乗り物や周辺の設備、さらにはオムニックの残骸さえも再利用のために手際よく小さな部品に分解していくのを見守った。レッカーたちは、斧やバール、はては重機まで使ってさまざまな物を扱いやすい大きさに解体していく。スカベンジャーは素材や布地、レアメタル、電子部品やその他の貴重品はないかとスクラップを選別している。そして何かが見つかれば、価値と有用性を見極めるティンカーたちと物々交換だ。彼らとは値切ったり値切られたりすることもあるし、見つけた物をめぐってケンカになることもある。「ほらほら、働きな」メリが仲間と言う。「スラスタの部品を見つけたら給料アップだよ」

ハモンドは建造物の頑丈すぎるドアに目を戻した。もうウンザリだ。ハモンドはクアッド・キャノンをぶっぱなし、オマケとばかりにメックを何度かドアに体当たりさせた。メックのハッチが少しガタつ

# 「認めたかないが.....缶詰野郎ども.....ヌルセクターは何かをつかみかけているのかもな。もうこの辺りで戦っている場合じゃないらしい。そうだな.....貴様とメリが新しい“足”を修理し終わったら、ちょいと世界を見に行くとするか」

いている。アリーナでロードホッグと戦った後遺症だ。ロック機構に問題はないものの、彼は完璧主義者なので痛に障る。直さないわけにはいかないだろう。

「よかったら爆薬を使うかい、チャンプ？」メリが親切に声をかけてくれた。

ハモンドが不機嫌そうにチューと言う。「ノー」メックの音声にもハモンドの苛立ちが滲んでいる。最後にもう一度ぶっ叩くと、ようやくドアは蝶番から外れた。

中に入ったハモンドは、そこそこの広さがある部屋を見つけた。いくつものモニターにさまざまなニュースが映し出されている。簡素だが、通信センターのようだ。モニターにはロボットによる全世界的な攻撃に関するニュースが映し出されていた。ハモンドは映像に目をパチクリさせながらハッチを開き、メックから出た。完全に予想外だ。

ジャンカーたちはオムニックを憎んでいるが、その一方で彼らを過小評価していたのでは？一瞬、そんな考えがハモンドの心に浮かんだ。オムニックがこの作戦指令室を作ったのだろうか？あるいは人間の集落から拾ってきたのだろうか？世界を監視しているのか？もしそうなら、なんのために？それが意味するところは？彼は少しのあいだ考え込んだが、答えを出すのは別の機会にして、出入口に引き返しながらかチューとつぶやいた。「大発見だ」メックが彼の言葉を翻訳する。「見ろ」

クイーンは、興味深そうにハムスターの様子を眺めながら出入口をくぐる。その手には斧をにぎっている。「なんだってんだ、グラップリング・フックがこんがらがったような顔しやがって？」そう言って部屋に入った彼女だが、さまざまなニュース映像を見てギョっとした顔になる。順番に時間を確かめていく。「ロサンゼルス、ロンドン、ヨハネスブルグ.....世界中かよ？」

ハモンドはうなづく。

「ヌルセクターか？オムニックのクソどもはいつも何かたくらんでやがる」ジャンカー・クイーンは納得したというようにレッキング・ボールを見てうなずいた。「お手柄だ、頬ひげ野郎」少し間を置いて彼女は言った。「認めたかないが.....缶詰野郎ども.....ヌルセクターは何かをつかみかけている

のかもな。もうこの辺りで戦ってる場合じゃないらしい。そうだな.....貴様とメリが新しい“足”を修理し終わったら、ちよいと世界を見に行くとするか」

ハモンドは左側最下段の画面に映し出されているニュースキャスターに注意を向けた。「もっとも最近ヌルセクターの攻撃を受けた都市レイコウは、中国でも有数のテクノロジーの中心地であり、ワンカイ工業、ルーチェン・インターステラー、ニューハーベスト・バンキングコンソーシアムなどの本社が置かれています」キャスターがそこで言葉を切ると、激しい攻撃にさらされる軍の部隊の映像に切り替わった。「ルーチェンや競合他社によって開発された独自技術は、ヌルセクターの危険性をさらに増大させる懸念があるため、政府はレイコウ防衛に特に多くの戦力を割いており.....」

画面の1つに映し出された、きらびやかな高層ビルの看板がハモンドの目にとまった。見間違えようがない。横にある青い矢印とそれを囲む月軌道の模式図。ルーチェン・インターステラーのロゴだ。かつて彼が住んでいた場所、ホライゾン・ルナ・コロニーの所有者である。

創造主。

——浅はかな神々。

こみ上げる興奮と怒りに彼は凍りつき、動くことができなくなった。一瞬の間にこの12年間の記憶は消え去り、彼は最も初期の、最も断片化された記憶という名のイメージの中に放り込まれた。

——柔らかい。暖かい.....母親。

ゴソゴソ。カチカチ。爪がプラスチックに当たる。上下する曲がりくねったチューブ。モゾモゾと動き、兄弟たちの間にもぐり込む。兄弟は多く、時間がたつとさらに増えた。今、彼は“幸せ”だ。素朴な幸福。

科学者たちは彼を迷路に入れる。彼は嗅覚を頼りに迷路を抜け、ゴールに置かれたご馳走を見つける。彼はパズルを解くことを学び、それを楽しむ。ご褒美もだ。大好きなヒマワリの種を、少し塩気を感じながらカリカリとかじるのは至福の時間だ。兄弟と競争をさせられていることは知らないが、彼は誰よりも素早く、頻繁にご馳走を見つける。彼は家族の中で一番大きくなる。ときどき、彼のご馳走を見つけるのがとても早いと、科学者たちは歯をむき出して大声を発し、紙を互いに手渡す。(この数年後、スクラップヤードでの戦いの喧騒の中で、彼はそれが“賭け”であったことを知る。科学者たちは暇つぶしに彼と彼の兄弟たちで賭けをしていたのだ。)

彼は孤独で、寒く、恐れている。他の人間たちからは「チャオ博士」と呼ばれている科学者の1人は、他の誰よりも彼を光る鋭い棒で小突く。ひどく痛い。戦うことも逃げることもできない彼は死を覚悟するが、兄弟の何匹かと違い、彼に死は訪れない。それは何か月もつづき、いつも彼は耐えがたい痛みを味わう。なぜ自分が生きていられるのか、彼にはわからない。

ある日、目を覚ますと、それまでと何かが違っていた。何度も繰り返し現れた兆候、一種のループ。チャオ博士が、他の科学者によって検査される彼に近づいてくる。

——標本8号の今朝の様子は？

ハモンドですよ、チャオ博士。名前をつけてやると発達が促進されることが判明しまして.....ですが、どうしてハムスターなんです？

# 母親の目を探すが、両者の間には距離以上の埋めがたい溝があった。

ゴリラより安上りだし、ハムスターなら何匹死のうと誰も気にしない。だからあまり入れ込まないように。

彼はさらなる処置を受ける。その後もさらに。彼は成長する、身も心も。彼はなぜ自分が実験台にされているのか不思議に思う。“実験体”とは科学者たちが彼に対して使っている言葉だ。彼の脳に高揚感が押し寄せてくる。彼は物事を“理解”する。洪水にも似た自己認識の奔流。彼は……賢く、特別で、“強力”だ。今の彼はもはや以前の彼ではない。彼自身も今の方が好きだ。

今回、科学者たちは彼を家には帰さなかった。科学者たちは彼を家族とは別の、専用の大きなケージに入れた。格子に爪を立てると、科学者たちは優しい口調で話しかけてきた。他の兄弟を押しつぶしてしまわないか心配していたのだ。前から彼は兄弟より大きかったが、今では何倍も大きくなっていて。これほど長い間ひとりぼっちだったことはない。母親の目を探すが、両者の間には距離以上の埋めがたい溝があった。彼は専用のケージから家族と一緒に遊んでいるのを見ている。家族は彼を気にも留めない。彼は寂しくて仕方がなかった。

彼は混乱し、苛立った。彼は科学者たちに尋ねようとする。どうして自分はひとりきりで……他の家族と“違う”のかを。彼は家族が恋しくてしかたなかったが、彼には言葉がなく、意思を疎通させるすべはなかった。科学者たちは彼がただふざけているだけだと思って笑い、もっとやってみせてくれと言って彼にご馳走を与える。

時とともに兄弟はつぎつぎと共同飼育場（話すことはできなくても、彼は科学者たちから多くの言葉を学んでいた）から消えていった。彼らにもハモンドが打たれたのと同じ注射が打たれる。そのたびにハモンドは、仲間が増えるのを心待ちにする。それが彼にとっての希望だった。

そして毎回、彼は悲しんだ。言いようのない悲しみ。彼の兄弟はみな死んだ。彼はネフスキー博士がグエン博士と相談しているのを見た。彼らは混乱している。自分たちの実験が失敗だったことを彼らは理解している。しかし彼らの表情からは悲しみも後悔も感じられない。彼は人間の表情を読む方法を学んだ。彼は自分の幸せがそれにかかっていることを理解するようになっていた。なぜ彼らは悲しまないのか、彼は不思議に思う。

ガシャ。

「おい、チャンプ！何だってんだ？」はっとしたハモンドが戸惑って辺りを見回すと、ナイフをこちらに向けて問いただすようなしぐさをしているクイーンが目に入った。ふと見れば、グラップリング・フックがモニターを完全に突き破っている。少しの間それをじっと見つめてから、ハモンドはフックを引き抜いた。

部屋に入ってきたメリが壊れたモニターに気づく。「お邪魔だったかい？」

ジャンカー・クイーンがため息をつく。「なんでもない。それよりどうした？」

メリはしかめっ面で答えた。「このゴミ溜めをくまなく調べおわったよ。もしかして必要なものがあるかもと思ったんだけど。ダメだね。ツキがなかったみたいだ」

不機嫌そうにクイーンが口元をゆがめる。「部品なしでどうやってあのオモチャを修理するんだ、メリ？」

メリは思わず一歩下がった。「もうちょっと探してみるよ」

ハモンドはちらりとメリを見た。だが、彼にはどうでもいいことだ。彼はすぐにレイコウ・タワーがまだチラチラと映っている壊れた画面に目を戻した。そこで彼は、はたと気がついた。

彼はクイーンたちにチューと言った。

「この哺乳類にはやることがある」彼に操縦されて外に出ながらメックが宣言する。

クイーンは興味深げに首をかしげ、メックの後を追った。「おいおい、貴様にはある程度の自由を与えちゃいるが、勝手にどっかへ行くのは許さないぞ。何するつもりだ？」

ハモンドがまくし立てる。「彼は部品のありかを知っている」とメックが通訳する。

それを聞くとクイーンは踵を返した。「そんなら話は別だ。私も連れていきな！」

ハモンドは首を横に振ってチチっと静かに言うと、ローリング機能を作動させて夕日が沈み行く西を目指した。「彼は1人で行かなければならない」走り去るメックから再び声がした。

「そうかよ、せいぜいくたばるんじゃないぞ」メックの背に向かってクイーンは叫んだ。「妙ちくりんなネズミだ」それから彼女はチーフエンジニアを振り返った。「貴様1人でやらないとダメみたいだぞ、メリ。おら、とっとと仕事にかかんな」

---

中国、レイコウ。月が街に青白い光を投げかけている。ヌルセクターの兵士に発見されることを避けるため、ハモンドはできるだけ目立たないようにレッキング・ボールを操縦しなければならなかった。街には多少の被害が出ていたが、オムニックの兵員輸送艦や武器弾薬の規模を考えれば、予想よりは少ないというのが率直なところだ。住民の避難がほぼ完了していることも、彼の仕事をいくらか楽にしていた。オムニックに対する巡視が定期的で、察知するのが容易なこともありがたい。

夜市はレイコウ・タワーの足元にあった。かつてはこんな夜更けでも賑わいを見せていたようだが、侵攻後も街に残っているのは、危険を気にしてられないほど切羽詰まっている、覚悟を決めた少数の者たちだけだった。おそらくは街の外での人間の反攻作戦がヌルセクターの注意を引いているのだろう。今は奇妙なくらいひっそりとしている。レッキング・ボールを夜市に滑り込ませると、ハモンドは脚を広げてメックを立たせた。濡れた街路に映るホログラム看板や照明が不思議なほど魅力的に見える。それは人口数百万人の都市と聞いて彼が想像していたものとは違っていた。もし人々が



# 高層ビルを見上げると、一瞬だけ自分が小さくて取るに足らない存在のように感じられた。少しばかりの恐れ。それが彼を怒らせる。今の彼に必要な怒りだ。

ひしめき合っていたら、これほどには心を惹かれなかったかもしれないな、と彼は思う。

タワーに入れる場所を探ろうとハッチから身を乗り出したハモンドは、近くから漂ってくる食べ物の匂いに驚かされた。ジャンカーたちは芸達者だが、その中に“料理上手”は含まれていない。「ふとっちょ母さんのあったか屋台」なる店を見つけた彼は、そこから漂ってくる芳醇な香りに心を奪われた。よく漬け込まれた肉と塩味のきいた野菜の味が口いっぱい広がってくるかのようだ……。

——ダメダメ。ガマンだ。ハモンドは膨らんだ頬からたれるヨダレをぬぐう。今必要なのは、スラスターの部品だ。しかし同時に彼は答えを求めている。「それと……たぶん仕返しも」誰にともなく彼はつぶやく。高層ビルを見上げると、一瞬だけ自分が小さくて取るに足らない存在のように感じられた。少しばかりの恐れ。それが彼を怒らせる。今の彼に必要な怒りだ。

ハモンドは不敵な笑みを浮かべた。

タワーの入口は、開放式の広い庭になっていた。目立たないように行動するのはここまでだ。重武装の警備兵たちが、5人1組で周囲をパトロールしている。侮れない人数だ。それに抜け目ない。タワーを守るため、堅固な陣地も築かれている。彼は鼻で笑った。それはルーチェンに関する彼の考えを裏付けるものだったからだ。ヌルセクターを街から撃退することに協力するのではなく、自分たちだけが助かろうというのだ。ハモンドは「魚は頭から腐る」という人間のことわざを聞いたことがあった。そのとおりだ、と彼は思った。——ルーチェンは腐った魚だ。いずれにせよ、彼には考えがある。

ハモンドは急いでレッキング・ボールのコックピットに収まり、グラップリング・クローを最大限に伸ばしてタワーに一番近い建物の角に引っかけた。そして地上数メートルの高さで機体をスウィングさせ、どんどんスピードを上げていく。そして、ここぞというタイミングでクローを解除。つづいてパイールドライバー機能を作動させる。レッキング・ボールは隕石のようにタワーのロビーに突っ込み、中にいた警備兵たちを吹き飛ばした。

ハモンドがチュチュっと言う。「大変だ」メックが抑揚のない音声で翻訳した。「ヌルセクターが攻めてきた。ヌルセクターは強いぞ。みんな逃げろ」誰も反応できないでいるうちに、ハモンドはメックを転がらせてロビーに戻ったが、その攻撃がセキュリティ部隊の大半を引き寄せるであろうことは承

知していた。となると時間がない。都合よく大きな案内図があったので見てみると、ルーチェン・インターステラーが一番上の10フロアを占めていることがわかった。探している部品はそこにある。ある、はずだ……あるといいのだが。ハモンドは急いでビルの横に回り、グラップリング・クローを使って10階、20階、30階とガラス張りのビルをよじ登っていった。

途中、静かな庭園があったので、彼はしばし立ち止まってそこを眺めた。ここはお偉いさんたちが部下を死の堀へ投げ込む場所に違いない。ハムスターはそう考えて1人で笑い、それから登攀を再開した。40階、さらにスウィングして50階。57階で彼は唐突に登るのをやめ、全面ガラス張りの窓に向けてクアッド・キャノンを発射した。コロニーで科学者たちが観ていた古いクリスマス映画のワンシーンを思い出したのだ。とどめとばかりにメックをスウィングさせて体当たりすると、さしもの防弾ガラスもたまたまらずに砕け散った。

オフィスは無人だった。ハモンドにとって好都合だったが、彼らにとっても幸いだったと言えるだろう。メックを操縦してエレベーターホールへ行き、ドアをこじ開けてシャフトに入ると、ハモンドはルーチェンが占有している63階を目指した。

エレベーターシャフトから出たハモンドを出迎えたのは、閉ざされた巨大なセキュリティドアだった。ジャンカー・クイーンがいたら、科学者がなんでこんなドアを必要とするのかと尋ねただろう。しかし彼は、ここがただのオフィスでないことを知っていた。ここには秘密がある。おぞましい秘密だ。

ハモンドはため息をついた。このドアを通してコントロールセンターに行くのは難しく、手間もかかるだろう。それに、ビルの側面に開けた穴にルーチェンの保安部が気づいたら、警備兵を派遣されるくらいではすまないはずだ。

ハモンドはビルの外周付近にあるエアダクトの調整装置までメックを移動させた。そしてメックから飛び出すと、必要な道具が揃っていることを確認してからダクトの格子を開け、中に入る。格子を閉める直前、彼はメックに向かって強い口調でチューと言った。

「自動照準モード、作動」メックが復唱する。

ダクトの中を走り、分岐のたびに立ち止まって方向を確認しながら、ハモンドはここは違うダクトのことを思い出していた。持ち前の鋭い嗅覚でご馳走を、そして工具を見つけたあのダクトを。今、彼の鼻は、8時間勤務している警備兵の乾いた汗から特定周波数の電磁波、つまりサーバータワーの熱反応を感じとっていた。ゴールは近い。遠い昔の勝利を思い出しながら、彼はニヤリと笑った。

最初の脱走の記憶だ。

ずっと昔の月面基地。誰もいないことを確かめると、ハモンドはその日ずっと頬袋に隠していたヘアピンを取り出した。夜に彼がケージから出ないよう、チャン博士がかけていた南京錠を外すのは楽勝だった。ケージの上に登り、天井に飛び上がると、ハモンドは爪で換気口を掴んだ。そして、これもまた隠し持っていたドライバーを使い、すばやくエアダクトに入る。

あの瞬間から、彼を閉じ込めておくことは不可能になったのだ。このダクトは、かつてハモンドが住んでいたハビトレイルの迷路や、科学者たちが彼の知能を測るために使った迷路を思い出させ、彼を

くつろいだ気持ちにさせた。当時、そして今も、彼は嗅覚を頼りに売店を見つけ、そこでコーンチップやサツマイモ、果物、アイスクリームをたらふく食べている。これほどいろいろな食べ物があるとは、彼にとって“想像の埒外”だった。後に彼はガレージも発見し、工具で遊んだり、壊れたメックを修理したり、スペアパーツから新しいメックを作ったりする楽しみを知った。パテル博士の部屋に“プレゼント”を置くことも大きな楽しみだった。人間に何かを仕掛けることは、彼の自尊心を満たした。しかしそれ以上に重要だったのは、何かを作ったり改造したり修理したりすることで満たされる、彼の飽くなき挑戦への欲求だった。まもなく彼に直せないものや作れないものはほとんどなくなった。

後にハモンドは、ジャンカーたちにも自分と同じような気質があると評価するようになる。廃棄物や壊れた物に新たな目的のために利用する気質だ。再創造とリサイクル。彼らが物事をあまり深く考えず、今この瞬間が楽しければいいという考え方をしている点も彼の気に入った。

やがてハモンドは、ダクトがどう張りめぐらされているかをすっかり覚え、他にも生き物がいることを知った……チャオ博士が自分にしたことを何と呼べばいいのか、彼にはわからない。“変化”では不十分だ。強化？進化？彼は格子の隙間から何種類かの生き物を見た。その“有り得べからざる”姿にハモンドの全身の毛が逆立った個体もいくつかいた。もうあの部屋のダクトには近づくのも嫌だった。しかしある夜、秘密の計画（いつかこの場所から逃げるための計画）に使う道具を運んでいると、換気口の下の部屋からネズミの鳴き声に似たキーキーという音が聞こえてきた。彼は立ち止まり、匂いを嗅いだ。それは彼とは違う匂いだったし、あの生き物たちとも違っていった。

格子の隙間から薄暗がりを見つくと、ベッドの上に毛むくじゃらの姿が見えた。またキーキーという音がした。彼は期待せずにはいられなかった。科学者たちの処置を生き延びたハムスターが他にもいたのだろうか？ようやく兄弟とまた暮らせるのだろうか？心臓が高鳴り、興奮と好奇心が警戒心を上回る。彼は静かに格子のネジを外し、部屋に入った。そして科学者たちに着せられていたワンピースのユニフォームから懐中電灯を取り出す。道具に入れられるポケットがついていなかったら、服なんてズタズタに噛み裂いていただろう。懐中電灯を点け、毛むくじゃらの生き物に忍び寄り……。すると、そいつがいきなり起き上がり、驚きの声を上げた。ハモンドは思わずチューっと叫んで飛びすぎる。相手も意味不明の声を発しながら天井に飛び上がった。

どちらもすぐには落ち着きを取り戻せなかった。ゴリラは開け放たれた格子にしがみつき、荒い息をあげている。パニック状態のようだ。ハモンドはそのゴリラが自分と同じようなユニフォームを着ていることと、服に28という数字が書かれていることに気づいた。このときハモンドの胸中にこみ上げた想い……。これは共感だろうか？この類人猿がハモンドと同じ境遇にあったことは間違いない。不審そうに彼を見るゴリラ。前足を上げて敵意がないことを示すハムスター。ふと、ポケットにピーナッツバターバーが入っていることを思い出す。ハモンドがバーをゴリラに投げると、ゴリラは一口食べ、笑った。晴れやかな笑みだった。

それを食べ終わるとゴリラはハモンドをじっくりと眺め、彼がどのような存在であるかにめくるめく好奇心を刺激されて笑い、ベッドの上でとび跳ねた。

ある夜、彼は一枚の絵を指し示した。  
そこには緑の斑点がある青い丸と、  
何もない冷たい宇宙空間を飛ぶロケット  
が描かれていて、ロケットの窓には  
ハモンドらしきものを肩車している28  
号の姿があった。

ハモンドはそこでようやくベッドのフレームが軋んでキーキーという音を発していることに気づいた。ドライバーでネジを締めてやる。すると28号は工具を指差し、目を丸くした。

どちらも話すことはできなかったが、28号はジェスチャーが得意だった。ハモンドも身振り手振りで懸命に答えようとする。やがてハモンドがその場を立ち去ろうとすると、ゴリラがまた来るかと熱心に尋ねてきたので、また来ると答えた。ドライバーを28号に放り投げてやると、28号はそれを宝物のように握りしめた。

これがハモンドにとって最初の友情のはじまりだった。彼と同じように、28号も他の者たちが考えているよりずっと高い知性を備えていた。そして彼と同じように28号も孤独で、他のゴリラからは浮いた存在だった。彼には純真無垢なところがあった。そんな彼に対してハモンドがかきたてられた感情は……庇護欲？それだけだろうか？ハモンド自身にも覚えがあった。世界を試してみたいという熱意。それは他のゴリラの大半を苛立たせ、彼らは28号を無視し嫌がらせをした。そうなった場合には当然、科学者たちがこの壮大な実験の社会的要素を調整しなおさねばならず、その都度彼は孤独になった。

ハモンドが定期的に友人にこっそりとお馳走を届けるようになると、ピーナッツバターが28号の大好物になった。彼はゴリラに修理の仕方まで教えてやった。お返しに28号はハモンドに……なんと  
言えばよいのだろうか？そう、素晴らしいことを夢見る方法を教えてくれた。ある夜、彼は一枚の絵を指し示した。そこには緑の斑点がある青い丸と、何もない冷たい宇宙空間を飛ぶロケットが描かれていて、ロケットの窓にはハモンドらしきものを肩車している28号の姿があった。

そして時は現在。複合施設の中央コントロールルームでは、2人の警備兵が無数のカメラ映像を操作していた。一方がふと天井を見上げる。「聞こえた？」

ハモンドが侵入する際に開けた巨大な穴の映像に気を取られていたもう1人は、うわの空で応じた。「何が？」

「屋根裏のダクトで何かがこすれる音」

「ただのネズミだろ」

再び天井を見上げる兵士。「ネズミねえ。“63階”に」

もう1人は鼻で嗤い、目を向けようとさえしない。「ネズミ以外に何がいていうんだ？」

その瞬間、天井の格子が開き、ハモンドが部屋に落ちてきた。驚きのあまり立ちすくむ兵士たち。1人があたふたと拳銃をベルトから抜こうとする。「こんな大きなネズミ見たこと……！」

彼女が言い終わる前に、ハモンドはさっとテザー銃を抜いて2人を昏倒させた。倒れる兵士たちを見て、彼はニヤリと笑った。

ハモンドは兵士たちが操作していたコンソールに椅子を寄せ、何をすべきか素早く見極めた。手始めに、ビル全体に警報を出し、通信システムにメッセージを入力する。「危険は解消されていません。タワーから避難してください」非常灯が消え、落ち着いた音声が繰り返し退避を呼びかける。モニターを見ると、警備兵たちに誘導されて出口へ向かう科学者や管理職員たちが映し出されていた。以前にハモンドは羊に関するジョークを聞いたことがあったが、彼はそれを面白いと思わなかった。彼が好きなのは、みっともなく転んだり手足が折れたりするドタバタ劇なのだ。

すぐに彼は頑丈なセキュリティドアのロックを解除し、遠隔操作でレッキング・ボールを呼び寄せた。だが次の瞬間、さらに2人の警備兵が部屋に飛び込んできた。

「動くな！手を上げ……」兵士が言いよどむ。いきなり身の丈1メートル近い重武装のハムスターと対面したのだから無理もない。「……ろ？」

ゴロゴロと音が近づいてくる。ハモンドは悪そうな笑みを浮かべる。はっと振り返る兵士たち。だが時すでに遅し。レッキング・ボールが2人をなぎ倒した。グラップリング・フックを使って気絶した兵士たちを部屋から引きずり出すと、ハモンドはあらためて室内に戻り、強化扉を閉めてコントロールセンターを封鎖した。遊びの時間は終わりだ。彼にはしなければならないことがあるのだ。

ハモンドはコンソールを操作し、さまざまなセキュリティ映像を次から次へとチェックしていった。必要な部品が保管されている場所はどこで、どうすればそこへ行けるのか？ふと、ある考えが浮かぶ。その考えは、単なるひらめきだけでなく、ゾクツとする恐怖もある。——誰なら知っているか、自分は知っている。不安を押し殺しながら彼はイライラと映像を切り替え、研究室か貯蔵施設のようなものはないかと探した。ハモンドは苛立ちのあまり小さく唸る。だが、別の画面が目にとまった瞬間、彼の唸りは止まった。そこに映し出されていたのは、タワーの中でもその周辺でもなかった。

それは二度と見ることはないだろうと思っていた場所の映像だった。かつて彼が家と呼んでいた場所。

ホライゾン・ルナ・コロニー。

ハモンドは映像を次々と切り替えはじめた。メイン格納庫である12番ベイは、彼が機械に関するあ

れこれを独学で学んだ場所だ。部品取りのために解体されたと思われるローバーやジャンプパックがあちらこちらに転がっている。温室にはたくさんの作物が実っていた。食堂は無人だ。彼や遺伝子操作された動物たちが教育やテストを受けた教室。医療区画。水耕栽培研究室。廃棄物処理場。

考えこみ、思い出の淵に沈んでいたハモンドは、突然の女性の声に飛び上がった。「標本8号ね？」

慌てて振り返ったハモンドにメックが「侵入者、接近」と告げる。

ハモンドは機械に向かって怒りの声を発する。

「パイロットの新たな暴言を検知。データベースに追加」

彼のすぐ目の前には、ホバーチェアに座った年老いて弱々しい中国人女性がいた。まるで虚空からいきなり出現したかのようだ。頬ひげを激しく震わせながら唸り声を発するハモンドに、老女は優しく微笑んだ。「私はあなたにとって危険な存在ではないわ、標本8号」彼女が名前ではなく識別番号で自分を呼んでいることも彼は気に入らなかった。

ハモンドはさらに唸り声を発した。人間には滑稽で取るに足らないものに聞こえるかもしれないが、その敵意こそ正真正銘の本物。

彼はいろいろと喚き散らしたが、メックは要点のみを拾って「彼のことはハモンドと呼ぶように」と通訳した。

老女はうなずいたが、従うつもりはないようだった。「“標本8号”は少し……主観性に問題があるようね。私を覚えている？」

ハモンドは彼女にチチとつぶやいた。

「彼は馬鹿ではない、チャオ博士」メックが通訳する。

彼女はまたうなずき、感無量といった口調で言った。「ずいぶん久しぶりなこと」

ハモンドがまた何かをつぶやく。「あなたは一足先にコロニーを去った」とメック。

「そうね……反乱の前という意味なら、イエスよ。でもご覧のとおり、私があそこで過ごした時間は充分過ぎるくらいだったと思うの。何年も月の重力にさらされたり、さらされなかったりで、私の体は修復できないほど萎縮してしまった。この歳になると、たとえ何年も理学療法を受けたとしても、失った筋肉を取り戻すことはできそうにない。サイバネティクス技術の被験者としても私は適格ではなかったようだし……」そう言って彼女はホバーチェアを示した。

ハモンドが嘲笑し、メックが通訳する。「ヌルセクターが侵攻してきたとき、あなたはタワーから退避するべきだった。愚かだ」

「望ましくない者の手に渡してはならない情報がここにあることを、あなたもよく知っているはずよ。CEOである私には責任があるの」彼女はため息をついた。「それに、危険か危険でないかを見分ける方法を学ばなければ、私のような年齢まで生きられないでしょうね。もしあなたが私の死を本当に望んでいるのなら……」そう言って肩をすくめる様子は、彼を挑発しているかのようだ。

チャオ博士をしばらく見つめてから、ハモンドは何かを言った。さらに、甲高い、だが意味のある唸り声を付け加える。

# 「会社は、あなたは類人猿の反乱で死んだと判断した。しかし私は疑っていた。あなたはいつも……“優秀”だったから」

「選択肢は残っている。このハムスターに情報を渡すか、さもなくば……」メックが言葉に変換する。「ファン・ユニグウェのアクティベーターはどこにある？反重力スラスターの部品だ」

彼女は返事をせず、ただ彼をじっと見つめた。「標本8号、あなたとの再会には驚いたけれど、嬉しくもあるわ。何年もの間、どこにいたのかしら？」

ハモンドがフンと鼻を鳴らす。メックの機械音声。「あなたには関係ない」

「会社は、あなたは類人猿の反乱で死んだと判断した。しかし私は疑っていた。あなたはいつも……“優秀”だったから」

チャオ博士がターミナルに近づく。ハモンドはメックのクアッド・キャノンを彼女に向けたまま、画面を見た。水処理プラントだ。まだ機能しており、ロボットによって手入れがされている。さらに、月面基地の構造材を作る製造ステーションが映し出され、とある部屋の映像に切り替わる。ハモンドは戸惑い、彼女を見た。どういつもりだ、というように首を傾げる。「あなたの昔の部屋よ。あなたが幾度となく楽々と脱走した檻」皮肉たっぷりに笑うチャオ博士。「鍵をどれだけ変えても、強化しても、ね」

ハモンドは再び唸った。メックが言う。「彼は指図されることを嫌う。何をすべきか、あるいは何をすべきでないかを」

「そう、あなたはいつも発想力に富んでいた。たしかチャン博士とフローレス博士が、あなたがどこへ行くか賭けをしていたわね」彼女は別のモニターの方を向き、ルナ・コロニーの古い監視映像を呼び出した。そこには重力レンチとレーザーカッターを使って機械をイジっている昔のハモンドが映っていた。「あなたは独学で工学を学んだ。ほら、あなたが作ったこの精巧な機械。あれを使って私たちに何ができるか考えてみて」

レッキング・ボールがハモンドに一歩近づく。ハッチがガタつく。ハモンドは歯ざしりする。後で直さないと。

ハモンドはチチっと答えた。

「小さいものをみんな見くびる」メックが言う。

彼女はそれ以上何も言わず、無言で訓練施設の映像を選び出した。いくつもの階で構成されたその巨大な体育館では、2頭の類人猿がリング上で模擬戦を繰り返しているところだった。片方には見覚えがある。昔、彼をからかって喜んでいた大柄なオランウータンのダイソンだ。ダイソンは歳を取

り、以前にも増して肉付きがよくなっているばかりか、自分用の防具や武器まで身に着けていた。

2人が見つめる画面の中で、類人猿たちは激しく殴り合った。ついに押さえつけられ、ダイソンは服従のジェスチャーをするが、オスカーはそれにかまわず、お前は死んだとばかりにとどめの一撃をお見舞いした。

ハモンドがチャオ博士にチチッと何か言う。「どういうことだ？」メックが問う。

「それはどういう意味？」チャオが問い返す。

ハモンドは顔をしかめ、画面を見つめたまま、長々と何かを言った。

翻訳に少し手間取った後、メックが言う。「どうしてルーチェンは月面基地を類人猿たちから取り戻そうとしなかったのか？何兆ドルもの損失だ。人間らしくない」

チャオ博士は苦々しい表情を浮かべた。「試しはしたの。この10年間、コロニー奪還のために3つのチームを送りこんだ。失敗のたびにチームの練度を高め、武装も強化して。しかし私たちはわかっていなかった。類人猿たちがどれだけ“賢い”かを。彼らは私たちの襲撃を予見していた。そして私たちが進歩する間に、彼らもまた進歩した」

ハモンドはチャオ博士の言わんとすることがよくわからなかった。彼女が再び映像を切り替える。今度はコロニー外部の映像だ。巨大な望遠鏡がゆっくりと、ほとんど気づかないほど左右に動き、宇宙空間をスキャンしている。ハモンドは、ルーチェンがこの施設で天体観測をしていたことを知っていた。大気に邪魔されない月面では、きわめて鮮明な画像が得られるのだ。

ハモンドは一度だけ実際に望遠鏡のところへ行き、長い時間覗いたことを思い出した。彼は星空を楽しめなかった。おそらくは種族レベルの感覚なのだろう。頭上に広がる虚空は、原始的な不安感を呼び起こした。げっ歯類は弱い動物であり、多くの場合、死神は頭上から襲いかかってくるのだ。

いや、と彼は考える。たしかに“ほとんどの”げっ歯類は弱い。しかし自分は違う。今の自分は弱くない。これからも餌食にされることはない。自分はハンターであり、破壊者だ。

彼はぼんやりと、類人猿たちはさまざまなシステムのメンテナンスを今もつづけているのだろうか、と考えた。あそこには、地球存亡の危機をもたらした小惑星を追跡するための望遠鏡もあったはずだ。ルーチェンの科学者たちが遠隔操作しているのだろうか？それともこの10年間、放置され、劣化し、今や地球は破滅が迫っても気づかない状態なのだろうか？

ハモンドが何か言う。

「望遠鏡は今もルーチェンの制御下にあるのか？」メックがチャオ博士に尋ねる。

彼女はうなずいた。「もっとも、今のところは宇宙からやってくる未知の危険より、そこに存在するとわかっている危険の方が心配だけれど」

類人猿か。

「皮肉ね……あなたは檻から逃げ出すのに多くの時間を費やし、類人猿たちの脱走を手助けしようと言った……ええ、そう、知っていたのよ。それなのにあなたは、自分で作った檻に隠れることを“選んだ”。あなたなりの生存戦略なのでしょうけれど」



# ハモンドはようやく理解した。 ルーチェンが自分以外に作ったものは、 それが何であれ、 つまるところただの動物なのだ。 生きるために何でもするただの動物だ。

ハモンドは彼女を睨みつけたが、攻撃は思いとどまった。彼女の見透かしたような顔は気に入らないが、その言葉は考えざるを得なかった。彼はターミナルを操作して画面をレイコウ・タワーの監視映像に切り替え、スラスターの部品探しを再開した。そしてついに目当ての物を発見した。場所はロケット研究センターの技術研究室だ。彼は映像に映っていた研究室の部屋番号を覚え、探していた部品の図面を表示させる。それは彼の記憶と違っていたが、大枠ではずっと昔に設計したものと同じだった。

暴力。悲鳴。彼はそれを避けようと全力を尽くした。あんなことをしていた科学者たちには何の愛情も抱いていないが、彼らが死に絶える様子を見届けたいとは思わなかった。類人猿の中には彼に怒りの表情を向けるものもいたが、彼らはハモンドより暴君たちを滅ぼすことに熱心だった。小さな体が彼にとって有利に働くこともあるのだ。

とはいえ、いつ類人猿たちが自分を始末しようと考えてもおかしくない。自分のために行動できる時間は限られていた。彼はダクトに入り、急いでスペースポートへ向かった。

途中、ハモンドはいくつものベイを駆け抜けたが、宇宙飛行士や科学者、作業員たちを月面基地と地球の間で往復させるためのシャトルを類人猿たちが破壊してしまっているのを見て、背筋が冷たくなった。彼はここから逃げる手段を失ったのだ。

14番ベイから物音がすることに気づいた彼は、気づかれないように注意しながらそちらへ向かった。彼の足がぴたっと止まる。28号、いやウィンストンが脱出艇の出発準備をしていたのだ。まるでかつて一緒に夢見た計画のようだ。2人がいつかコロニーを去るためのロケット。ウィンストンは慣れた手つきでロケットのスラスターの最終調整を済ませ、ハッチを閉じてコックピットに向かった。ハモンドは混乱し……傷つき、怒った。ウィンストンはハモンドを連れていく気がないようだ。そこから導き出される結論は残酷だった。そもそもウィンストンは友だちでさえなかったのだ。

ハモンドはようやく理解した。ルーチェンが自分以外に作ったものは、それが何であれ、つまると

ころただの動物なのだ。生きるために何でもするただの動物だ。

唐突にハモンドはチャオ博士がテザー銃を構えていることに気づいた。寸前のところでワイヤーをかわし、メックに命令を下す。グラップリング・フックが発射され、博士の手から武器を叩き落とした。

だが博士はなおもハモンドの追想をかき乱した。「どうしても知りたいことがあるの、標本8号。ウィンストンはあなたが脱出に便乗したことに気づいていたのかしら？」

ハモンドは目をそらし、顔をしかめた。

そんな彼をじっと観察するチャオ博士。「自分は無事だと知らせたこともない。親友に会いに行こうとしたこともない。たぶん、彼がいるオーバーウォッチに加わる気もないのでしょうかね」

ハモンドは彼女を睨みつけ、強い調子でチューチューと言って、ご丁寧にペツと唾まで吐いた。

メックの機械音声。「彼は盗んだ……通訳不能。げっ歯類による不適切な言葉の使用を検知」

彼女は降参というように両手を上げた。「なるほど。デリケートな問題ということね。それでも、どうして彼を探そうとしなかったのかしら？なんであれ、彼もあなたも脱出できたのだから」

ハモンドは何か答えようとしてやめた。そんなこと、考えもしなかった。彼はおちついた口調でチューと言った。

メックが通訳する。「彼には新しい友人たちがいる」

「そしてあなたは、ずっと小さなボールに閉じこもって世界から隠れている。ただの怯えたネズミね」

彼は動じなかった。「恐れを抱くに足る理由があった。しかしこのハムスターはもう恐れていない」

この会話はもう終わりだと強調するために、ハモンドは映像を切り替えた。巨大なガラス張りの壁に隔てられて、頭上に地球が大きく見える。そういう景色を好む者にとっては絶景だろう。ウィンストンはこの眺めが大好きだった。一度ウィンストンに連れてこられたが、ハモンドはこの眺めが大嫌いだった。広すぎる。いや、思い出が多すぎるからかもしれない。

だが、今映し出されている景色は彼の記憶とは何かが違っていた。ハモンドには違和感の原因がわからなかった。

——なぜ？かれこれ10年以上、ハモンドはそのことを考えつづけてきたが、決定的な答えにたどり着けていなかった。彼はわかっていたはずだ。それこそ自分がここにいる大きな理由の1つだということ。彼は忘れかけていたのだ。ハモンドが何か言う。

「なぜ？」メックが強い口調で問う。

問いの意味がわからず、チャオ博士は彼をじっと見た。

「彼は知りたいと言っている。あなたが彼や他の実権体にしたことの理由を」

彼女は長い間ハモンドを見つめ、それからふうっとため息をついた。「正直に言えば、最初は思い上がっていた。できるからする。それだけ。その後は賞賛と……資金調達のためね」

ハモンドに驚きはなかった。彼がこれまで出会った人間のほとんどは傲慢で自信過剰だった。例外と言えるのは、戦闘でレッキング・ボールを負かした唯一の人間、ジャンカー・クイーンくらいだ。いや、クイーンも傲慢には違いないのだが、少なくとも彼女にはそれだけの実力がある。

「なぜ“ハムスター”、オランウータン、ゴリラなのか？」発生が懸念される問題は多かったはずだ。実際、多くの問題が発生した。「生命をオモチャにし、神をあざわらう行為だ」

彼女は肩をすくめる。「遺伝子操作で何ができるのか、自分たちの能力の限界に興味があったの。私たちが何を試みたかを知ったら、あなたは驚くでしょうね。あなたはそのほんの一部を見たにすぎない。しくじれば恐ろしい結果を招く……それは認めるわ。だからこそ、あそこでしかできなかった。もし地球で誰かが逃げ出したらどうなることかしら。想像できる？だけど、成果は素晴らしいものだった。自分を見てごらんさい！」

ハモンドは鼻で笑い、チチっと言った。「あなたが創造した者たちは檻から逃げ出し、科学者たちを殺した。“成功”の新しい定義だ」

チャオの返答は彼を驚かせた。「基礎的な研究成果がわかっていないよね。低重力が動物に与える長期的な影響、月での生命維持の可能性……私たちは地球や月での活動のことしか頭になかった。けれどその後、プロジェクトの対象範囲が変わったの。類人猿たち、そしてあなたも長生きすれば、長期的な宇宙旅行計画の一部になることでしょう」

「壮大な計画だ」レッキング・ボールが言う。「類人猿たちが立てていた計画とは違うが」

チャオ博士は苦笑いした。「私たちから与えられた贈り物に彼らが感謝すると思うの？」

ハモンドは愕然とし、怒りの声を上げた。

メックが言葉に変換する。「どの生命体も、あんなことは願っていなかった。たとえそれによって……より優秀になったとしても、そのために苦しんだ。責任はあなたたちにある。浅はかな神々よ」

地球の映像に向き直ったハモンドは、この景色のどこに違和感を覚えるのかに気づいた。ガラス張りの壁の外側に、かつては存在しなかった建造物がある。まだ一部しか出来上がっていないが、科学者たちが築いたものではない。

——おかしい。

彼の思考は、遠くの廊下から聞こえてくるレーザーソーが金属板を切り裂く特徴的な音によって遮られた。セキュリティ部隊が防壁を突破しようとしているのだ。ハモンドは監視カメラを一瞥する。やはりそうだ。待機させていたレッキング・ボールに飛び乗る。してやられた。チャオ博士は時間稼ぎをしていたのだ。

彼女はモニターを見て勝ち誇った笑みを浮かべた。「おしゃべりに夢中になってくれてよかったわ、標本8号」興奮を隠しきれない様だ。「だけどあなたはもう包囲されている。上も、下も、周りもね」笑みを浮かべる博士。「ウィンストンはもうルーチェンの所有物ではないかもしれないけれ

# 怒りに身を任せ、彼は身を乗り出してコントロールパッドを操作し、ルナ・コロニーへメッセージを送信した。 “君たちは監視されている”。

ど……あなたが自由を得たことなんて一度もなかったし、これからもありはしない」

激怒したハモンドは、メックを前進させ、マルチツールを取り出すと彼女の椅子の右腕部にある操作パネルを何度も突き刺した。ドサッ。浮力を失い、床に落ちるホバーチェア。ハモンドは彼女を見下ろし、怒声を発した。

「彼は誰のものでもない」メックが通訳する。

「殺したいなら殺しなさい。何をしても無駄よ」ひるみながらも博士は言う。「言ったでしょう、私は年老いているけれど、ルーチェンを盤石にした。死ぬことを恐れたりしない」

ハモンドがどなる。「発言をテスト中」クアッド・キャノンを回転させながらメックが言う。チャオ博士は目を固く閉じ、身じろぎしながら、なかなか来ない弾丸の嵐を待っていた。クアッド・キャノンの回転が止まり、戸惑いながら彼女は目を開けた。ハモンドが何か言うと、メックが「嘘つきめ」と通訳した。彼女から部品のありかを切り出されなくてよかった。そんな話をされたら、確実に罠にはめられていただろう。

ハモンドは兵装システムを完全に解除した。どうだと言わんばかりの博士の眼差しから目を背けながら、ハモンドはチーチューチューと言った。「この哺乳類はあなたを殺さないと決めた。あなたが築き上げた帝国の崩壊を目の当たりにさせるつもりだ」メックが宣言する。

怒りに身を任せ、彼は身を乗り出してコントロールパッドを操作し、ルナ・コロニーへメッセージを送信した。“君たちは監視されている”。

さらに、メックがチャオ博士の音声を流す。“正直に言えば、最初は思い上がっていた。できるからする。それだけ”。

ギクリとしたチャオ博士は一瞬目を見開いたが、すぐにそれはしかめ面が変わった。「賢明ね。でも手遅れよ」

セキュリティ部隊が室内に突入してくる。叫ぶチャオ博士。「逃がさないで！」

ハモンドは唸り、チューチューとわめいた。「誰が逃げるものか」メックの音声。「このハムスターはついに目的を果たそうとしている」

ハモンドはレッキング・ボールの中に入り、ハッチを閉じると、クアッド・キャノンを回転させながらけたたましくチューと言った。「彼を止められるものならやってみろ」メックが宣言する。「望むとこ

るだ」この言葉に対して人間たちは（それぞれが防弾アーマーを着用し、ハモンドが見たことのないライフルを装備していた）、攻撃をもって応えた。

「降伏しろ！」隊長が叫ぶ。「多勢に無勢だ。貴様は完全に包囲されている！」

ハモンドは命令を笑いとばした。

「愉快！」メックが叫ぶ。「彼はこれが大好きだ！」

ハモンドは威嚇しようと発砲する。攻撃にさらされ、メックが警告を発する。「被弾。アダプティブ・シールド作動」ハモンドはメックの手足を収納すると、ローリング機能を作動させ、敵の手薄な部分をやすやすと突破した。逃げ遅れた兵士を跳ね飛ばしながら含み笑いをもらすハモンド。

「増援を送れ！」隊長が通信機に怒鳴る。

「到着します！」

廊下からさらに大勢の兵士が駆け込んでくる。笑みを浮かべる隊長。「こいつを始末するぞ！」

ハモンド、いやレッキング・ボールは、背後を振り返った。つぶらな瞳に侮蔑の色が浮かぶ。今の彼にはチャオ博士が弱々しく、無力に見えた。「ルーチェンにハモンドは止められない。今までも、これからも」彼は歓声を上げ、密集している敵に12発の対人マインを放った。床に散らばり、不気味に点滅するマイン。爆発までほとんど猶予がない。人間たちは驚くほど独創的な罵詈雑言をわめきながら逃げまどった。

ハモンドはマインを起爆させながら、よしとうなずいた。

通りからは、ルーチェン・インターステラーが入っているガラス張りのタワーの一角が吹き飛んだように見えた。マインの爆光に照らされたガラスの破片が、危険な花火のようにきらめきながら、63階から通りに降り注ぐ。ハモンドは警備兵たちが怯んだ隙を見逃さず、メックを窓から飛び出させた。落下しはじめると、すかさずグラップリング・フックを射出し、爆発でむき出しになった鉄骨を捉える。巧みに爆発を避けた兵士たちが銃撃を開始するが、ハモンドはメックをスウィングさせてビルを曲がり、寸前で弾丸をかわす。そして彼は再びメックをスウィングさせて3階下に戻り、先ほど確かめた製造研究室を目指した。必要なものはすぐに見つかった。クイーンが欲しがっていた次世代反重力スラスター用の重要部品だ。人間たちは態勢を立て直し、彼を追撃しようとしている。

だが、もう遅い。レッキング・ボールは素早く地上まで降下した。サイレンが近づいてくる。たくさんのサイレンだ。彼は戦いが大好きだが、ここは“逃げるは恥だが役に立つ”の精神だ。彼は踵を返し、夜の街へ転がっていった。

ひと気のないレイコウの街を進みながら、彼は今回の一件について考えた。比較的単純な調達ミッションだったはずなのに、予想外の展開になってしまった……だが、結果オーライだ。今回、彼は多くのことを学んだが、それは新たな疑問を生じさせた。チャオ博士から答えを聞き出し、博士に“復讐”してその計画にモンキーレンチを投げつける（この表現に彼は思わず笑ってしまった）だけで充分と思っていたが……もはやそれだけでは不十分だ。

ルーチェンに関わる全員に、自分たちがしたことを償わせなければ。類人猿たちは月から出られ

ないかもしれないが、ハモンドはそうではないのだ。彼の手にはピカピカの新しいおもちゃがあり、面白いことなら何でも大歓迎という少々イカレ気味の友人もいる。次はチャオ博士から逃げるだけでは終わらせない。類人猿たちが始めたことにケリをつけ、すべてを台無しにしてやろう。もしかすると類人猿たちの手も借りることになるかもしれない。

---

朝日がアウトバックを照らす中、ジャンカー・クイーンは古い波型のトタン屋根からの眺めを楽しみつつ、湯気を立てるマグカップのコーヒーを一気に飲み干すと、放棄されて久しい町から拾ってきたボロボロのデッキチェアから立ち上がった。「朝日ってやつは最高にキラついてやがるぜ」クイーンはつぶやく。「約束してくれてるみたいじゃないか。これから楽しいことがはじまるってよ」そばに立っていたメリとガイガーを振り返ってクイーンは尋ねた。「計画はどんな具合だ？」

「心配ないよ」メリは請け負った。「準備完了まであと少しだ」少し口ごもった後、付け加える。「棚上げになってる反重力スラスタの件が解決すれば、だけど」

遠くから何かが砂埃を巻き上げながら近づいてくる。クイーンは目を細めた。よく見えないが、脅威なら放ってはおけない。「ガイガー？」

ガイガーは、半分機械化された体の収納スペースから望遠鏡を取り出し、残っている片目に当てた。ガイガーが望遠鏡をクイーンに放り投げる。クイーンは難なくそれをキャッチし、彼と同じように覗き込んだ。そこに見えたのは、彼女の方へ疾走してくるレッキング・ボールの姿だった。彼女の口角がわずかに上がった。

それから少し後、ようやくメックはジャンカータウンの壁にたどり着いた。ハッチが開き、ハモンドが大きく伸びをしながらゆっくりと出てくる。ハッチはわずかにガタついているが、もうほとんど気にならない。ハモンドは広々とした朝の空を見渡し、はるか遠くに淡く見える欠けた月をはじめて美しいと思った。

「おやおやおや」壁の上に立ったクイーンがニヤニヤ笑いながら言う。「放蕩ネズミが帰ってきやがった。へ口へ口じゃないか。また床板に頭突きを食らわしたのかよ？」

ハモンドは肩をすくめる。「ハムスターは黙して語らず」と、メックが代わりに答えた。

クイーンは首を傾げる。「少なくとも目的は果たしたのかよ？もう待たなくていいんだらうな？」

彼は気のないそぶりで親指を立てた。「任務成功」とメック。

クイーンは口元をゆがめてニヤリと笑い、顎をしゃくって集落の入口を示す。彼女なりの帰還の祝福だ。

メリは通信機を取り出し、マイクのキーを押した。「ゲートを開けな。チャンプのお帰りだ」